

## 浦江古墳群 1号墳

— 彩色壁画を有する古墳の調査 —

— 浦江遺跡第5次調査3 —



2005

福岡市教育委員会

## 浦江古墳群 1号墳

— 彩色壁画を有する古墳の調査 —

— 浦江遺跡第5次調査3 —

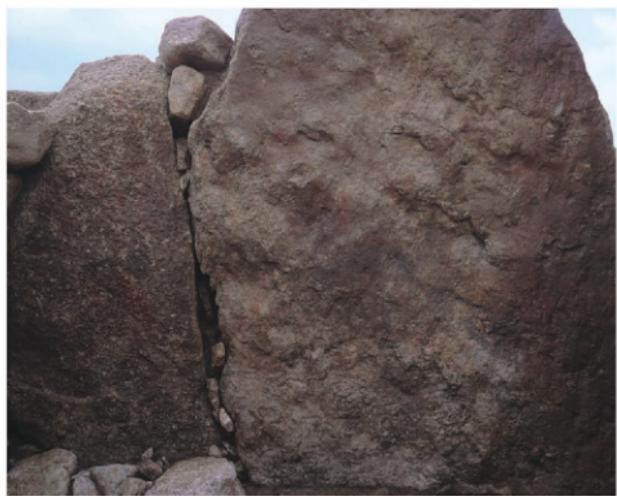


2005

福岡市教育委員会



(石丸 洋氏 摄影)



浦江 1 号墳 彩色壁画

## 序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査を行って記録保存という形で往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成15年度に行いました、浦江古墳群1号墳調査の内容について報告するものです。第1号墳は墳丘規模、及び副葬品の内容から、この地域における首長クラスの墳墓と目されるものです。特にこの調査では、埋葬施設である横穴式石室の奥壁に彩色壁画が描かれていることが判明し、福岡市内でも2例目となる貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用頂ければ幸いです。

また、金武地区圃場整備組合、福岡市農林水産局、及び地元の皆様の御理解、御協力のおかげで、当古墳の現地保存、及び将来的な活用が可能となりました。深く感謝申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 植木とみ子

### — 例 言 —

- ・本書は福岡市西区大字金武字塚原における浦江古墳群1号墳の内容確認調査報告書である。
- ・発掘調査は福岡市教育委員会が主体となり、藏富士寛が担当した。調査に当たっては、同教育委員会の山崎純男氏、吉留秀敏氏、米倉秀紀氏、池田祐司氏の指導、助言を受けた。
- ・本書の編集・執筆は藏富士が行った。
- ・本書で使用した遺構、遺物実測図は担当者の他、比佐陽一郎氏（福岡市埋蔵文化財センター）、天野玄普氏、下原幸裕氏（福岡大学大学院生）が作成した。
- ・本書使用の標高は海拔高。方位は国土地理院における座標北である。
- ・本書に関わる資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
- ・装飾古墳の調査、並びに彩色壁画の撮影について、福岡県教育委員会 石丸 洋、石山勲両氏に御指導、御協力いただいた。
- ・出土鉄製品の処理については福岡市埋蔵文化財センターに御協力いただき、比佐陽一郎氏には、鉄製品に関する多くの御教示を受けた。
- ・調査期間中は多くの方々に御来駆いただき、貴重な御指導、御助言を得ることができた。以下に御芳名を記し、感謝申し上げたい。

伊崎俊明 石丸 洋 石山 勲 小田富士雄 蒲原宏行 小池史哲 甲元眞之 小松 讓 杉井 健 高木恭二  
武末純一 生田目和利 西谷 正 榎宜田佳男

## 目 次

はじめに .....	1
1. 調査にいたる経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
 第1章 位置と環境 .....	2
1. 地理的・歴史的環境 .....	2
2. 浦江古墳群 .....	3
 第2章 調査の記録 .....	4
1. 墳丘・周溝 .....	4
2. 埋葬施設 .....	10
3. その他の時代の遺物 .....	27
 第3章まとめ .....	28
1. 出土遺物と時期 .....	28
2. 浦江古墳群について .....	28
3. 彩色壁画について .....	30
 おわりに .....	32

遺跡名	浦江1号墳				
遺跡調査番号	0144-2		遺跡略号	UEK-1	
地番	西区大字金武字塚原		分布地図記号	金武94	
開発面積	—	調査対象面積	1,850m <sup>2</sup>	調査面積	1,850m <sup>2</sup>
調査期間	2002.11.1 ~ 2003.1.31				

## 挿図目次

- 図1 調査・保存対象範囲 (1/800)  
図2 早良平野の古墳群 (1/50,000)  
図3 浦江古墳群 (1/1,000)  
図4 トレンチ配置 (1/400)  
図5 周溝土層 (1/60)  
図6 墳丘 (1/300)  
図7 周溝出土遺物 (1) (1/4)  
図8 周溝出土遺物 (2) (1/4, 1/8)  
図9 墳丘土層 (1/60)  
図10 横穴式石室 (1/60)  
図11 閉塞 (1/40)  
図12 閉塞出土遺物 (1/4)  
図13 墓道土層 (1/60)  
図14 周溝外墓道土層 (1/60)  
図15 周溝外墓道出土遺物 (1/4)  
図16 墳丘断面 (1/160)  
図17 彩色壁画 (1/60)
- 図18 床面の赤色顔料 (1/60)  
図19 石室内遺物出土状況 (1/8, 1/60)  
図20 玄・前室内出土遺物 (1) 馬具1 (1/2, 1/4)  
図21 玄・前室内出土遺物 (2) 馬具2 (1/2)  
図22 玄・前室内出土遺物 (3) 馬具3 (1/2)  
図23 玄・前室内出土遺物 (4) 馬具4 (1/2)  
図24 玄・前室内出土遺物 (5) 武器・工具 (1/2)  
図25 玄・前室内出土遺物 (6) 装身具 (1/1)  
図26 玄・前室内出土遺物 (7) 釘など (1/2)  
図27 玄・前室内出土遺物 (8) 土器 (1/4)  
図28 玄・前室内出土遺物 (9) 小像 (1/3)  
図29 前室 (仕切石～奥門部) 出土遺物など (1/2)  
図30 その他の時代の遺物 (1/2, 1/4)  
図31 浦江古墳群A群の諸石室 (1/120, 1/8)  
図32 早良平野の彩色壁画 (1/60)  
図33 彩色壁画の広がり

## 図版目次

- 図版1 上 浦江古墳群全景 (東から) 中 浦江1号墳遠景 (北西から) 下 浦江1号墳全景 (南西から)  
図版2 上 調査前現況 (北東から) 中 横穴式石室全景1 (南から) 下 横穴式石室全景2 (南から)  
図版3 上 左側壁側トレンチ (北西から) 中 右側壁側トレンチ (北東から) 下 奥壁側トレンチ (北西から)  
図版4 上 トレンチ2土層 (北西から) 中 墓道土層1 (南西から) 下 墓道土層2 (南から)  
図版5 上 閉塞検出状況1 (南から) 中 閉塞検出状況2 (北から) 下 閉塞石 (南から)  
図版6 1 玄室奥壁 (南から) 2 玄門部 (北から)  
3 玄室左側壁 (東から) 4 玄室右側壁 (西から)  
5 前室・羨道右側壁 (北西から) 6 前室・羨道左側壁 (北東から)  
図版7 1 羨道左側壁 (東から) 2 羨道右側壁 (北から)  
3 玄室全景 (南から) 4 玄室搅乱状況 (南から)  
5 玄室内遺物出土状況 (南から) 6 前室内遺物出土状況 (南から)  
図版8 1 1号墳周辺の諸古墳  
2～5 出土遺物

## はじめに

### 1. 調査にいたる経緯

平成13年度から新規5カ年国庫補助事業として、金武地区農村振興総合整備統合補助事業が着手され、これを受け、教育委員会埋蔵文化財課では対象地域における遺跡の発掘調査を開始した。平成13・14年度は浦江遺跡を中心とした調査を進めていたが、調査区内に存在する古墳群中の1基（1号墳）が、墳径20mを超える大形墳であり、この地域における首長クラスの墳墓とも目ざれることが明らかとなった。そして、主体部である横穴式石室の奥壁に彩色壁画が発見されるに及び、その重要性を鑑み、埋蔵文化財課では土地改良区や地権者、工事担当部局、施工業者を交えて1号墳の保存協議を開始し、同時に1号墳およびその周辺を重要遺跡の確認調査として、保存・活用を前提とした調査に切り替えた。関係各位の御協力により、1号墳周辺の1.850m<sup>2</sup>（図1）を現地において盛土保存することが決定し、その結果をふまえて教育委員会では調査成果の記者発表、そして現地説明会を実施した。2002年8月2日に行なった説明会では、県外の方々も含め250人を超える参加があった。

1号墳の調査は2002年11月1日から2003年1月31日に及び、最後にマサ土による埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。

### 2. 調査の組織

調査は以下に示す組織でおこなった。

調査主体	福岡市教育委員会	教育長 生田征生	文化財部長 堆 徹
	埋蔵文化財課	課長 山崎純男	調査第1係長 力武卓治
調査担当	藏富士 寛		
調査庶務	文化財整備課	課長 平原義行	管理係長 市坪敏郎
発掘作業	天野玄普 井上忠久 岩室博子 加島定次郎 児島勇次 高瀬孝二郎 西嶋利規	管理係 後藤泰子	西島マツ子 西嶋ムラ子 西嶋洋子 平田千鶴子 平山栄一郎 宮原邦江 吉田勝善
	脇坂チカ 脇坂信重 脇坂ミサヲ		
整理作業	柴田加津子 萩本恵子 日名子節子 下原幸裕（福岡大学大学院生）		

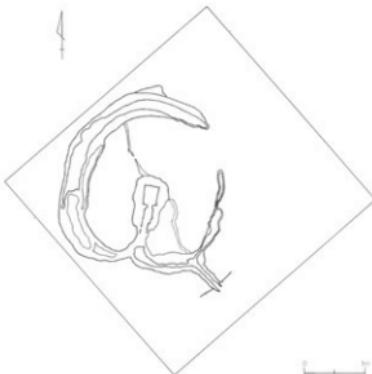


図1 調査・保存対象範囲 (1/800)

# 第1章 位置と環境

## 1. 地理的・歴史的環境

早良平野は福岡平野と糸島平野の間に位置する。平野には室見川を始めとする大小の河川が流れ、これら河川の沖積作用によって、早良平野は形成されている。浦江古墳群は早良平野の南端に存在し、1号墳はこの古墳群中の1基にあたる。早良平野の西側に存在する飯盛山・西山の東麓には、羽根戸古墳群・金武古墳群等、古墳時代後期を中心とする群集墳が営まれているが（図2）、浦江古墳群も数ある群集墳の内の一つに位置づけることができる。浦江古墳群は西山北東麓の扇状地上に所在する古墳であり、主として丘陵上に展開する近在の金武古墳群に比して、やや低地に存在している。

浦江古墳群の周辺には、野方遺跡・羽根戸遺跡・吉武遺跡・城田遺跡など、古墳時代における大規模集落が営まれておる（図2）、これからはこれら集落の消長を視野に入れた群集墳の理解が求められるだろう。浦江古墳群は浦江遺跡の範囲内に存在するものである。浦江遺跡はこれまで5次にわたる調査が行われ、縄文時代から中世にいたる遺跡の存在が確認されている。特に浦江5次調査における、縄文時代早期の貯藏穴・集石炉、弥生時代中期における内部に壺棺を伴う区画墓、古代の大形建物や製鉄遺構、中世における居館・城郭等の存在は特筆すべき事項であるといえる。



図2 早良平野の古墳群 (1/50,000)

## 2. 浦江古墳群

浦江古墳群は2001年より開始した圃場整備事業に伴う発掘調査により認知された古墳群である。現在13基の古墳の存在が確認されており、1号墳(SO-01)を除く他12基の概要是既に報告を行っている(吉留編2004)。周辺には更に多くの古墳が存在することは確実であるが、ここでは浦江古墳群について簡単に整理しておきたい。浦江遺跡第5次調査において、浦江古墳群は発見調査されており、古墳は3区、5区と名付けた調査区内において確認している(図3)。3区には11基(SO-01・02・03・04・05・06・07・08・09・15・53)の古墳、5区には3基(SO-02・03・04)の古墳が存在するが、同じ次の調査において、区を違えるだけで同一番号の古墳が存在する(SO-02～04)など、古墳群としての理解そして記述を行う上ではやや不便な点も認められる。そこで、本書では浦江古墳群における各古墳の呼称について以下のようにしたいと思う。

3区と5区との間には浅い谷が存在し、両者は50m程の距離がある。本来ならば古墳時代の地勢を考慮して判断すべきではあるが、ここでは3区を浦江古墳群A群、5区をB群と呼称することにする。そして、3区(A群)の古墳は01から順に1号墳、2号墳と呼び代え、SO-15を10号墳、SO-53を11号墳とする。5区(B群)については、SO-04を1号墳として、SO-02、03をそれぞれ2号墳、3号墳と呼ぶことにしたい。

浦江古墳群の特徴について次の点を挙げることができる。

- 1) A群において径20mを超える2基の円墳(1・3号墳)が存在すること。
- 2) 横穴式石室を内部主体とし、TK10(古・新)型式期の古墳が主体を占めること。
- 3) 彩色壁画を有する古墳(1号墳)が存在すること。

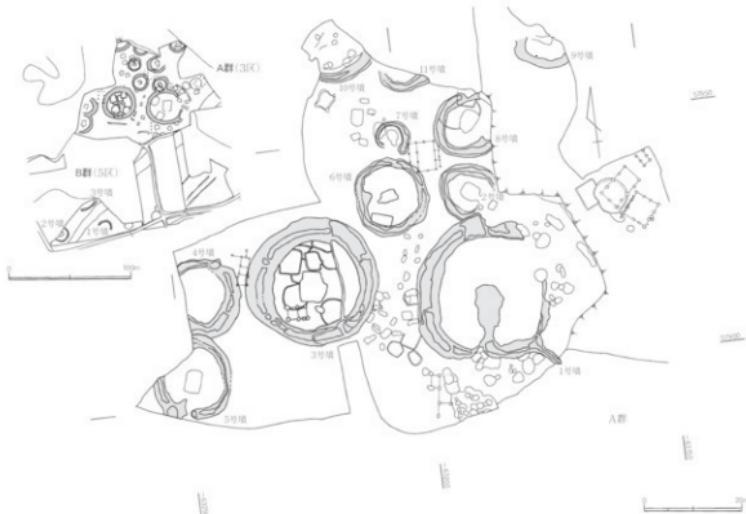


図3 浦江古墳群 (1/1,000, 1/4,000)

## 第2章 調査の記録

### 1. 墳丘・周溝

### (1) 古墳の現況と周溝トレンチ調査(図4・5、図版2上・4上)

浦江1号墳は3号墳と並び浦江古墳群の中心となる規模をもつ古墳である。浦江古墳群中の諸古墳は2001年1月より開始した、西区金武地域における集落基盤整備事業に伴う発掘調査中に発見されたものであるが、その例外がこの1号墳である。

浦江古墳群の周囲は当時水田となっており、当然各古墳は削平され、墳丘を失っていた。しかし1号墳だけは主体部である横穴式石室の奥壁が畦の中に残され、地表から観察することができた。図6に示した墳丘上に走る段差は畦の痕跡である。調査はまず、石室奥壁と目される石材のある畦周辺を残し、重機により水田耕作土を除去することから開始した。その結果、古墳築造時の基盤は1号墳東側では地山である花崗岩バイラン土が残るのに対し、西側は暗褐色砂質土であるという違いがあることが明らかとなつたが、なによりも石材部分を中心

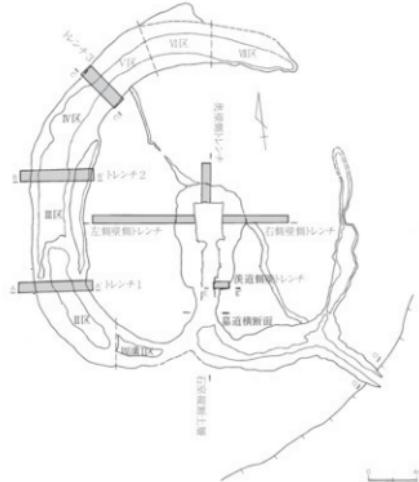


図4 トレンチ配置 (1/400)

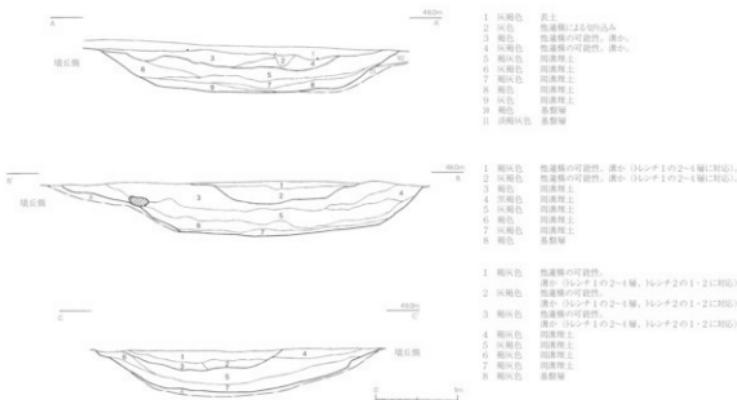


图5 前沟土层(1/60)

心として溝が巡り、径 20 数メートルの円形を描くことを確認したこと、畦中に見出された石材が古墳に伴うものであることが確実となった。更に 1 号墳の規模を確定するために、まず周溝形態の判然としない周溝西側を中心にして数本のトレンチを設定、調査をおこなった（図 4・5）。トレンチ 1～3 の土層をみれば墳丘西側の周溝は 3.5～4m、深さ 0.5～0.6m を測ることが分かる。特にトレンチ 1・2 の所見を参考にすれば、周溝は底面が広く平坦で、断面台形を呈しているといえよう。尚、各トレンチの土層上部には深さ 20cm 程の浅い落ち込みがある。1 号墳周溝に一部重なる形で南北方向に走る溝状遺構が存在していた可能性が高い。

#### （2）墳丘形態（図 6・7、図版 1）

トレンチ調査の結果を踏まえて周溝を完掘、古墳の全形を明らかにしたのが図 6 である。墳丘西側の周溝は幅 4m 近くを測るのに対し、東側の周溝は一部が途切れ、また遺存部分にしてもごく浅いものでしかない。しかし周溝底面をみれば、その高さに差はない（図 16）、この違いは墳丘東側がより削平を受けた結果が現れているに過ぎない。また周溝北側では、周溝の外縁が外側へ大きく張り出しているが、これは切り合い関係にある 2 号墳周溝を誤って掘削してしまったためのもので、本来は通常通りの円弧を描いていたと考えて良い。以上より周溝形態を考慮すれば、1 号墳は南北 25m、東西 23m を測る円墳とができるだろう。

また、周溝南東側では墳丘外に向かってのびる枝溝が存在する。主体部である横穴式石室の羨道から墓道にかけての状況をみれば、この枝溝は周溝を通って墳丘外へと続く墓道として機能していたと考えるのが最適であり、周溝の南側、つまり石室正面の部分では周溝が墳丘側にややくびれるのも、周溝の一部が墓道として機能していた証左といえるだろう。枝溝（以下では周溝外墓道と称することにする）は 4m 程で切り落とされており、のびる先是不明である。このような墓道と目される遺構が検出されたのは 1 号墳のみであり、浦江古墳群中の他の古墳では発見されていない。尚、周溝外墓道については後述する。

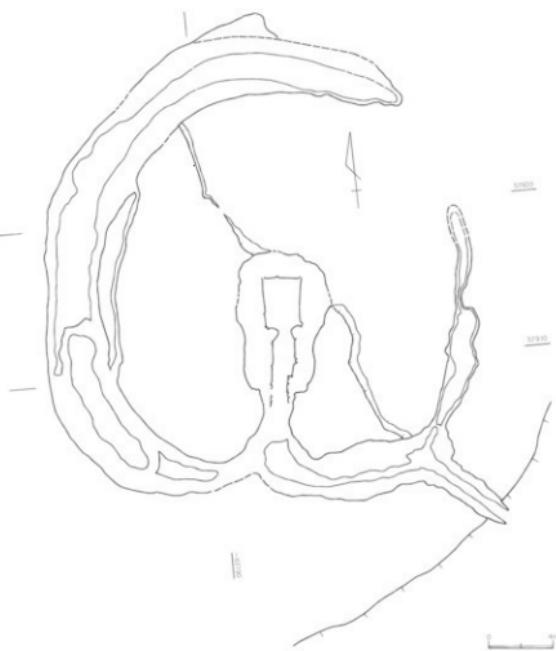


図 6 墳丘 (1/300)

### (3) 周溝出土遺物（図8・9、図版8）

1号墳周溝からは須恵器を中心とした多くの遺物が出土している。土師器は少ない。遺物は便利に周溝を7区画に分け（図4）、それぞれの区画毎に取り上げを行った。遺物の出土は周溝南西側に設定した周溝II区に顯著な集中があり、器種の上でも壺の他、蓋杯、高杯、壺、壺類と多彩な構成をみせている。大形壺はIII区を中心とした古墳西側で検出した。またこのIII区では陶質土器片（図8-13）も出土している。

尚、周溝VI・VII区出土の遺物は2号墳周溝中の遺物が混入している可能性もある。以下では、出土遺物について説明することにしたい。

#### 須恵器（図7・8）

蓋杯（図7-1～13） 1～4は杯蓋である。いずれも端部を丸く収めるもので、体部がやや丸みを持つもの（1～3）や、体部が直線的で端部近くでは下方に折れ曲がるもの（10）がある。3が天井部に静止ヘラケズリを施す他は、すべて回転ヘラケズリ調整を施している。2～4は天井部にヘラ記号を有する。5～12は杯身である。いずれの個体も口縁端部は丸く収めている。比較的高く直立しているもの（5）が1点ある他は、すべて低く内傾した立ち上がりを有する。尚、9は底部にヘラ記号を持つ。13は陶質土器。受部下には2条の沈線を巡らし、杯下方には螺旋状に施された沈線とコンパス文が認められる。

高杯（図7-14～21） 14・15・20・21は脚部片である。14は長脚2段スカシの脚部で長方形のスカシを3方向から施している。スカシの間には2条の沈線を有する。15では、長方形のスカシが3方向から施されていることが確認できる。外器面にはカキメ調整を施す。20は長方形のスカシを3方向から施し、スカシの上下には沈線を有する。21は3方向から長方形スカシを2段にわたって施している。スカシの間には2条の沈線を施す。脚端部は上下方向に張り出し、鋭く仕上げている。16は脚基部片で、脚部には3方向のスカシが施される。17～19は脚端部片である。端部がわずかに肥厚するもの（18）、端部を鋭く上方に折り返すもの（18・19）がある。19は脚部中央に沈線が認められる。

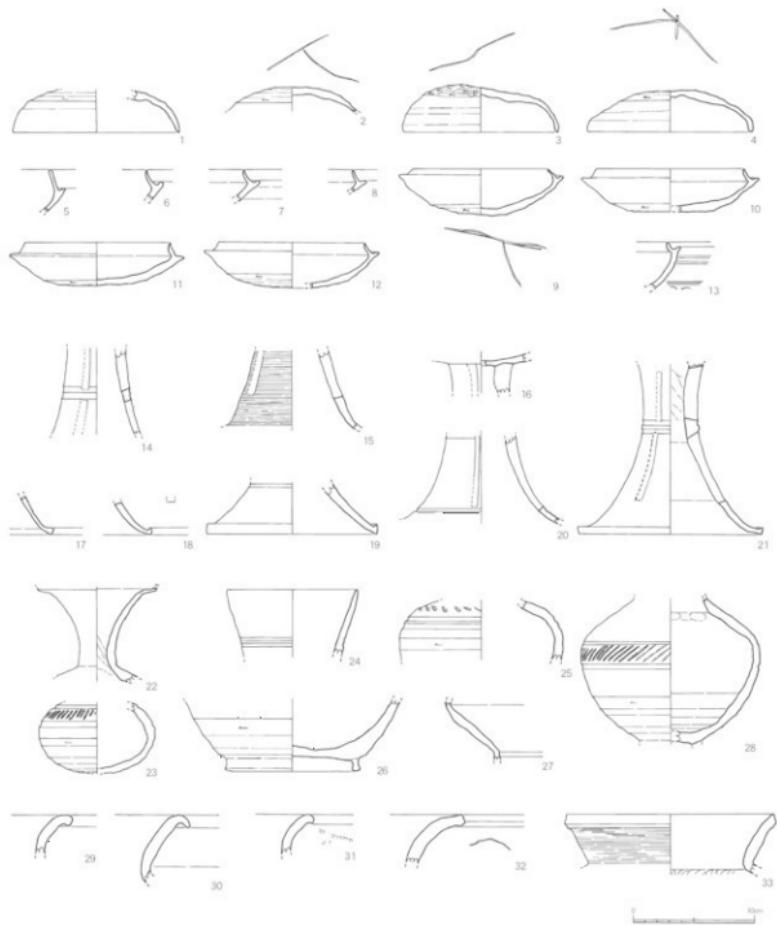
壺（図7-22・23） 22・23は同一個体である可能性が高い。22は口頭部で、上方に向かって緩やかに広がり端部付近で大きく外反し、その後上方へと伸びている。23は胴部。下半には回転ヘラケズリ調整を施し、肩部には2条の沈線の間に刺突文を施す。

壺類（図7-24～28） 24は長頸壺の口縁部。外面に2条の沈線を施す。25は長頸壺の胴部で、肩部には2条の沈線を有し、その上方に刺突文を施す。下半は回転ヘラケズリ調整。26は台付長頸壺の底部で、低い台部を有する。27は長頸壺の肩部片。肩部と胴部の境は稜をなし、その下には弱い沈線を施す。28は台付長頸壺の胴部片。脚部と台部を欠損する。胴部中央には2条の沈線の間に刺突文を施す。外器面下部には回転ヘラケズリ調整。

甕（図7-29～33、図8-1・2） 29～33は口縁部片である。端部の形状にはわずかに肥厚し、折れ曲がるもの（図7-29・31）、肥厚せず大きく屈曲するもの（図7-30）、わずかに肥厚し、端面をナデつけて山形に仕上げるもの（図7-32・33）がある。図8-1・2は大甕。1は口頭部に4段の沈線を施し、その間に波状文を充填している。また、沈線2段目上には粘土粒により突起を貼付ける。外器面は平行タタキ、内器面は円弧タタキの後、きれいにナデ消している。3は口頭部に2段の沈線を施し、その上に波状文を描いている。外器面に平行タタキ、内器面は円弧タタキを施す。

#### 土師器（図8-3～6）

甕（3～5） 3は頭部が直立し、口縁部に向けて緩やかに外反する。口縁端部はわずかに肥厚し、



周溝 I 区 : 1 · 11 · 12

II 区 : 3 · 5 · 6 · 7 · 8 · 10 · 14 · 15 · 16 · 17 · 18

19 · 20 · 21 · 22 · 23 · 24 · 25 · 26 · 27 · 30

IV 区 : 22

V 区 : 22 · 26

VI 区 : 24 · 29 · 33

VII 区 : 9

图 7 周溝出土遗物 (1) (1/4)

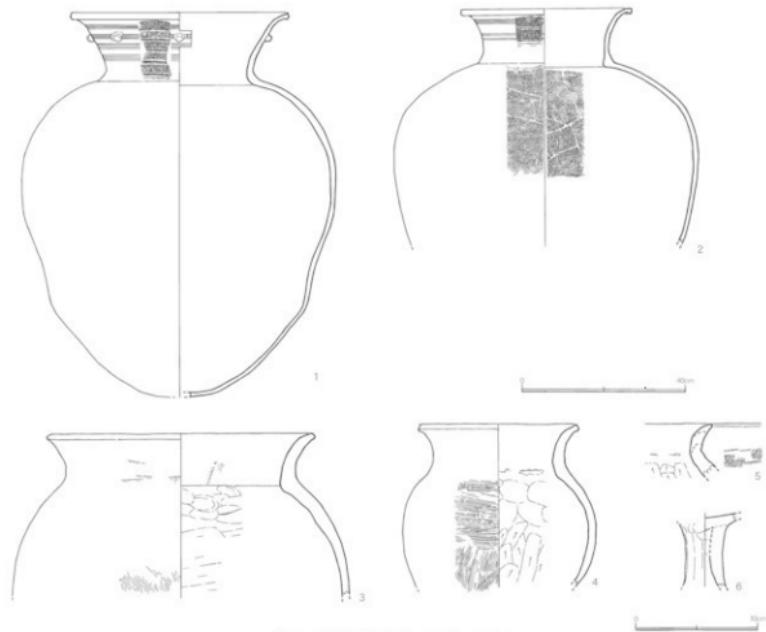


図8 周溝出土遺物 (1/12、1/4)

端面をわずかに窪ませている。口径 21.6 cm を測る。4 は頭部がくびれ、口縁部が大きく外反するもので、外器面にはハケ目調整、内器面にはヘラケズリを施す。口径（復元）12.6 cm を測る。

高杯（6） 基部片である。外器面には綫方向のケズリを施す。基部径 3.0 cm を測る。

#### (4) 墳丘トレンチ調査（図9、図版3）

墳丘の遺存状況、及び横穴式石室の構築状況を確認するために、玄室の奥壁、左右側壁側に各軸線に沿ってトレンチを 3 本、そして羨道部の石積みの状態を確認するためのトレンチを 1 本、計 4 本を墳丘各部に設定し（図4）、調査を行った。尚、古墳の保存を前提としたトレンチ調査であるため、範囲は石室自体に影響の及ばない程度に留めている。その結果は図9に示している。

玄室各壁体に設定したトレンチでは、石室築造時の堀方を検出した。堀方内は黄褐色土、褐色土、暗褐色土を互層状に敷き詰めて石室石材を固定している。石室堀方の上部には数度にわたる掘り返しの痕跡が確認できる。これは石室石材の周間に渡って認められるものであり、横穴式石室破壊時の痕跡である可能性が高い。各トレンチの墳丘掘削部分では、土層を観察する限りでは墳丘盛土を確認することができなかった。1 号墳の墳丘部分では基盤層が露出しており、盛土はすべて削平されているものと考えている。

羨道側壁側のトレンチは羨道右側壁側に設定した。右側壁側の石材は薄く、貼石状に壁体に設置されており、その裏側にはやや広めな堀方の中に大形の石材が配されている。また羨道床面は地山の削り出しによるものではなく、貼土がなされていることも分かった。

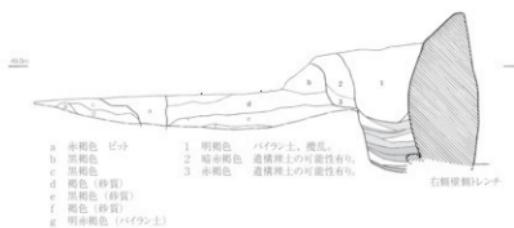
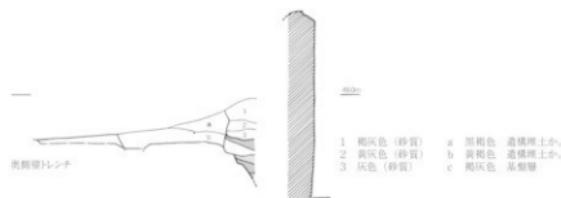


図9 填丘土層 (1/60)

## 2. 埋葬施設

### (1) 横穴式石室（図10、図版6・7）

前述したように、浦江1号墳の主体部は横穴式石室である。南方向（S-8°-W）に開口し、複室構造を採る。石室上半は破壊されているが、遺存部分の状態は良い。尚、玄室奥壁では彩色壁画が発見されたが、このことについては後述する。使用石材は花崗岩。

**玄室** 長さ2.9～3.3m、幅2.1～2.4mの長方形プランを呈する。壁体は基底部に配された花崗岩の巨石のみが残り、他は失われている。残存部分の壁体は奥壁・左側壁側各2枚、右側壁側1枚の石材により構成される。右側壁・奥壁東側の石材はやや高く（高さ2～2.3m）、左側壁・奥壁西側の石材は低い（高さ1.3～1.5m）石材を使用する。そして左側壁では玄門袖石との間に更に低い石材（高さ1m）を配する。右側壁では袖石との間に小塊石を充填する。奥壁側には石室内面側が比較的平滑な石材を使用しているが、左右側壁側ではやや平坦さに欠ける。敲打等による石材表面を平滑にする加工は認められない。

玄門部では柱状の塊石を立て袖部とし、前室幅よりわずかに内側へ突出させている。幅0.7mを測り、床には敷居石を設置する。高さは不明だが、現存する袖石の高さ（玄室床面より1.5m）を大きく超えることはないだろう。

床面には攪乱を免れた各壁近くの隅部に敷石が良く残っている。敷石には扁平な石材を用いて床面を平らに仕上げ、その石と石の隙間に小石を配する。大部分の敷石は基盤層上に配置され1面の敷石が残るだけであるが、玄門部付近の敷石では、敷石面の上に更に扁平石材が置かれている。玄門部敷居石底面の高さが第1面の床石の高さと等しいことや、石室壁面に融着した鉄製品の高さが第2面敷石上面の高さと対応していること等を考えれば、第2面の敷石が存在した可能性が高い。ここでは先述の石材を敷石とみなし、玄室には2面の敷石が施されていたものと考えておきたい。尚、玄室の床面は第1・2面とも前室床面よりも低い位置にある。

**前室** 1号墳石室では玄門部の先、2.7m程の地点において、右側壁が張り出して袖部を形成しており、1号墳石室は複室構造であるとみなすことができる。ただ、①右側壁側のみに袖部がある、いわゆる片袖の形態を採ること、②九州において顕著な袖石を内側に突出させる袖部形態ではないこと、③仕切石と袖部の位置が一致しないこと、には注意しなければならない。

前室は長さ2.7m、幅0.8～0.9mを測る。側壁には1～2段のみの石積みが残る。左右両側壁とも基底部には大形石材を1石配している。また床面には敷石を有する。敷石は玄室に施されたものよりも一回り大きく、扁平な石材を緻密に組み合わせて平坦面を造り出しており、玄室のそれよりも精緻な印象を受ける。そして、前室の途中、玄門部より2m程の位置には仕切石を設置している。仕切石と玄門部の間の敷石は一転して粗雑なものとなっている。仕切石は2石目なり、1石は柱状の石材を横位に配した通有のものだが、2石目、右側の石材は柱状の石材を立てて設置している。しかも2石目の幅は袖部の張り出し幅とほぼ等しい（言い換えれば、左側の仕切石は羨道幅とほぼ等しい）。これらが何を意図したものかは不明である。

**羨道** 幅0.9～1m、長さ1.5～1.9mを測る。床面は前室のそれに比して10～20cm程更に高く、また入口に向かってなだらかに上昇している。つまり、1号墳石室では、床面が入口から玄室に向かって次第に下降することになる。前室部分から続く敷石が1石あるのみで、羨道部には敷石は施されていない。前述したように、羨道部は貼土となっている。

石積みをみれば、羨道部側壁は右側と左側で大きく異なっている。羨道左側壁では前室左側壁より

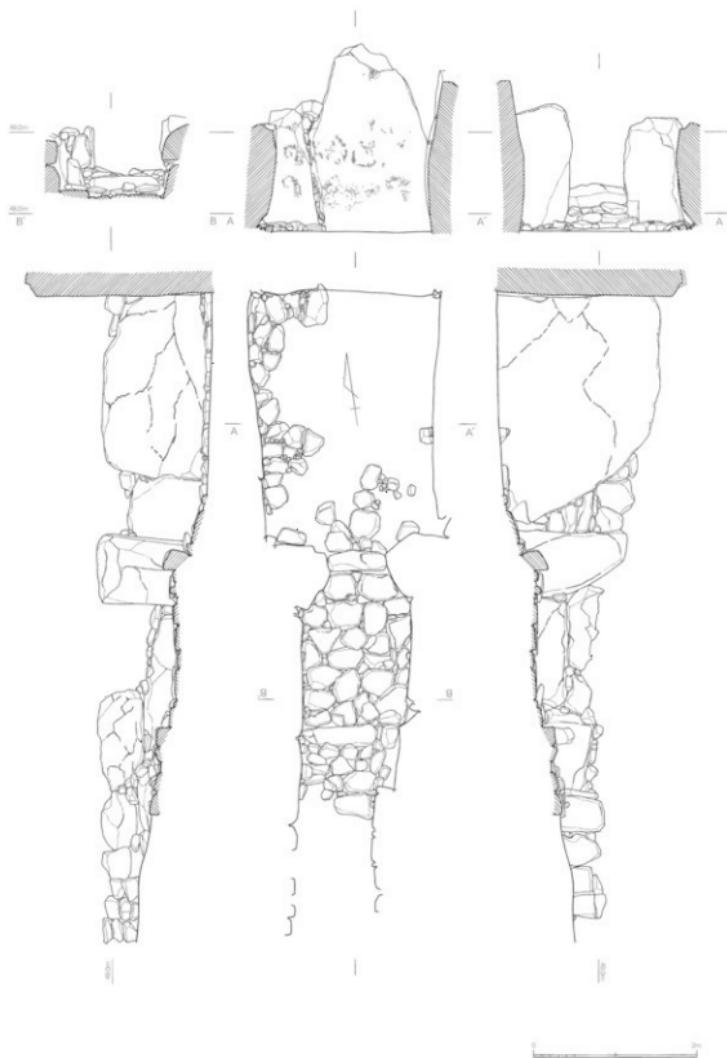


图 10 横穴式石室 (1/60)



図 11 閉塞 (1/40)

続いて羨門部より 0.5 m 程の位置にまで巨石を配した後、小振りの石材を用いるようになる。現況では 2~3 段の石積みが残る。この部分の石積みには次のような特徴がある。①底面は前室側壁 1 段目石積みの上端レベルとほぼ等しい。②石積みは削り残されている基盤層上より行われる（図 9 参照）。右側壁では扁平でやや小振りな石材を縦位に配している。現在は 1 段分が残るのみである。トレンチ調査の結果では、この裏側にも一部大形石材が配されることが確認できた（図 9）。

#### 閉塞 (図 11・12、図版 5)

羨門部では閉塞施設を確認できた。閉塞には高さ 0.7 m、幅 0.8 m の板石を用い、その前面には塊石を積み上げる。石室破壊時の影響により、閉塞石は南側へ位置をずらし、塊石群は羨・墓道中に散乱しているが、大概の閉塞状況は窺うことができる。

まず、閉塞石を羨門部、ちょうど前室敷石との境の部分に設置し、大振りで、やや扁平な塊石を前室側、羨道側双方に配置して閉塞石下部を固定する。そして塊石で閉

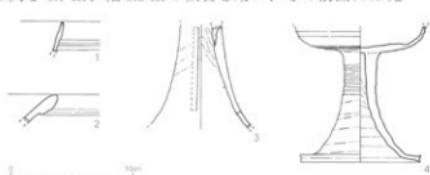


図 12 閉塞出土遺物 (1/4)

塞石を埋め、その外側にはやや小振りな塊石で覆っている。尚、閉塞の状況からは追葬行為等の痕跡をみることはできなかった。遺物は搔き出された塊石の中から、須恵器が数点認められたのみである。

**出土遺物（図12）** 1は杯の口縁部片である。外面には2条の沈線が巡る。2は甕の口縁部片。口縁部は肥厚する。3・4は高杯脚部片である。3は長脚の高杯脚部で、スカシが3方向より施される。4は口縁部を欠く。脚中央部には1条の沈線を螺旋状に施し、脚上部及び杯底部にはカキメ調整が認められる。

#### (2) 墓道（図13～15、図版4中・下）

石室入口から先は基盤層を掘り抜いたのみで石積みを持たない墓道が続く。その墓道部分における土層を示したのが図13である。それをみれば黄褐色土を使用した計2面の床面があることが分かる。以下では、下の墓道面を墓道第1面（標高48.4m前後）、その上のものを墓道第2面（標高48.6m前後）と呼ぶことにする。第1面の使用時、墓道は立ち上がりのしっかりとした断面台形を呈し、現況における深さ0.6mを測る。基盤層掘削時、やや凹凸の認められる底面を最初に暗褐色土（9・10層）、最後に黄褐色土（8層）を敷き詰めて床面を仕上げている。第1面の貼土は石室入口より先2m程の位置までに限られ、墓道全体に及ぶものではない。墓道第1面はそのまま平坦に周溝底面まで続く。墓道第1面より0.2～0.3mかさ上げされた場所に墓道第2面がある。第2面も暗褐色土の上（4・5層）に黄褐色土（3層）を敷き、床面を構成する。流入土（6・7層）も認められる点は、第1面使用後ある程度時間が経過していたことを示しているのかもしれない。第2面時の墓道は現況で深さ0.4m程しかなく、壁面の立ち上がりも緩やかとなる。また、土層観察の際、第2面の埋土中に閉塞行為に由来すると考えることのできる塊石が混入していると判断しているが、これが正しければ、墓道第2面構築の際、閉塞部の大幅な改変を伴う造成が行われたと解釈することができる。墓道第2面の埋土は石室入口より4m付近で途切れ、3m程続いた平坦面は周溝部分で窪みをみせる。調査時に検出した漢道床面はこの墓道第2面に相当する。従って図10等、図示している漢道床面線の下に更にそれ以前の床面（第1面）が存在していることになる。

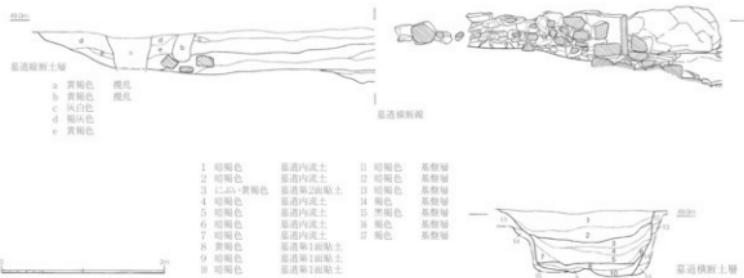


図13 墓道土層（1/60）

墓道はこの後、周溝と交わって東側へ折れ、周溝外墓道へと続く。周溝外墓道の形態および埋土の状況を示したのが図14である。南東側の肩部にやや乱れがあるが、立ち上がりの急な、しっかりととした掘方を有している。墓道の底面には黄褐色土が堆積しており（6～8層）、上面は黒みを帯びている。これは6～8層上面が一定期間墓道として機能していたためと考えられ、墓道の床面に黄褐色土を敷くという石室漢道より続く墓道部分の所見とも一致する。基盤層掘削面が築造当初の墓道として使用されていたと想定し、これを墓道第1面とするならば、6～8層上は墓道第2面に相当するといえるだろう。

**出土遺物**（図15）1・2は杯蓋である。1は天井部片で、外面にはヘラ記号を有する。2は全形を窺うことができる。体部はふくらみを有し、口縁端部は丸く收める。天井部は回転ヘラケズリ調整。3は高杯脚部片。方形の3方向スカシを2段にわたって施している。スカシの間には2条の沈線を有する。4は壺の底部片。底部には深い回転ヘラケズリを有する。

### （3）墳丘・横穴式石室（図16）

ここで、これまで述べてきた墳丘と石室の状況についてまとめておくことにしたい。横穴式石室（玄室）を軸に墳丘の横断面、縦断面を作成したものが図16である。先にも述べたように墳丘部分には基盤層が露出しており、墳丘盛土は残っていない。図16をみれば、古墳築造に際し、まず標高48m前後に底面を持つ周溝を造らし、現況で13m程の深さ（標高47.7m前後）を測る墓坑を掘削していることが分かる。従って横穴式石室の半ば以上が墓坑内に存在することになるだろう。この後、横穴式石室を構築しながら墳丘を盛り上げていくことになるのだが、墳丘規模と石室の位置を考えれば、墳丘には段築が存在し、それが2段築成であった可能性が高い。

玄室部分において、最も深く墓坑を掘削した後、漢道部分では標高48.3m前後と基盤層の掘削深度は石室入口に向けて、次第に浅くなっている。玄室床面、そして恐らく前室床面においても、基盤層の上に敷石を配しているのに対し、主として漢道部分、第2仕切石より先の部分では土（墓道第1面埋土）を貼り込みながら、敷石を施していることが分かる。墓道における土層の観察により、敷石部分より先では床面が水平に延びていることが分かっている（墓道第1面）。この後、墓道第1面に盛土を行って、新たな墓道を作り上げているのだが（墓道第2面）、この時には床面は水平ではなく、入口に向かって次第に高くなる若干の傾斜を持つものに変化している。

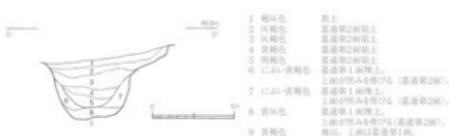


図14 周溝外墓道土層（1/60）

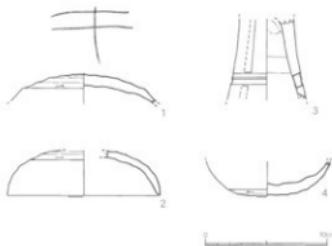


図15 周溝外墓道出土遺物（1/4）

ところで、先に羨道部分の石積みが途中で変化し、小形の石材を横位に、そして縦位に配するようになることを述べた。この石積みの底面は墓道第2面に適応するように配されている。従って、墓道第1面時の高さまで下がると石材底部が浮き上がった形となり、安定を欠く状態となってしまう。また、羨道側壁に設けたトレンチでは、側壁の裏側に更に大型石材が存在していることが判明している（図9）。以上の点から、ここでは石積みの変化部分、つまり現況における羨道石積みの大半が、墓道2構築段階に積み直された可能性を考えることはできないだろうか。この想定が当を得ているとすれば、前室側の袖部は存在しなかったことになり、1号墳石室は築造当初単室構造を採っていたことになる。そして、羨門幅に適応するように設けられた閉塞石、及び閉塞部分はすべて、墓道第2面使用段階のものとなる。墓道第2面中に塊石が混入していることは先に述べたが、以上の想定が可能であるならば、この塊石は、墓道第1面使用時の閉塞石という解釈も成り立つだろう。

#### (4) 装飾（図17・18、巻頭図版）

1号墳の玄室奥壁には、彩色壁画が描かれている。赤一色のみを用い、側壁等他箇所には存在しない。奥壁の左側石材に描かれた壁画は比較的明瞭で、荒れた花崗岩の壁面には顔料が厚く残っていたのに対し、右側壁側では比較的表面の平滑な花崗岩であったためか、赤色顔料がごくわずかに残るのみであり、壁画の遺存状況は極めて悪い。

調査ではまず、壁面を霧吹きで湿らし、毛先の柔らかな筆を用いて丹念に泥や汚れを払うという作業を行い、壁画の全容を明らかにした。実測には、壁面を割り付けした後、壁面にマイラーを重ねて赤色顔料の一部を拾い集めていった。このようにして作成したのが図17である。

最も良く認識できる文様は左側石材の壁画であろう。石材の中央に上下2段に蕨手状の渦巻き文様を見ることができる。「渦巻き文様」という点でみていくと、右側石材の右側下方にも同様の文様が存在することが分かる。左側に存在する渦巻き状の壁画も同様な文様として描かれていたのかもしれない。しかし、中

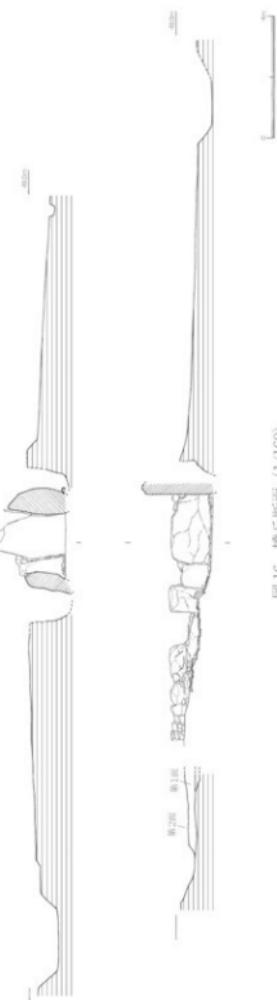


図16 墳丘断面 (1/160)



図17 彩色壁画 (1/30)

心モチーフに相当する可能性の高い右側石材の中央部に描かれた壁画等、その他の文様については判然とせず、不明であるとせざるを得ない。右側石材の上部や、奥壁主要構成石材だけではなく、石材の隙間に使用された小石材にも壁画の痕跡が残ることをみると、壁画は奥壁全面にわたって描かれていたのだろう。

ところで、玄室床面の敷石上にも赤色顔料を認めることができた(図18)。顔料は2箇所、①奥壁そば ②入り口付近において、点状に散らばった状態でそれぞれ見つけることができた。想像をたくましくすれば、①は壁画を描いていた最中、②は顔料を石室内へ持ち込む際に滴下してしまったものであろう。この床面上の顔料から、次の2点を明らかにすることができる。

- 1) 奥壁が完成し敷石が敷き詰められた状態、つまり石室が完成した状態で壁画が描かれていること。
- 2) 玄室床面に2面の敷石が存在し、顔料は下の敷石より検出されていることから、壁画は初葬の段階に施された可能性が高いこと。



図18 床面の赤色顔料 (1/60)

## (5) 出土遺物

### 遺物の出土状況 (図19、図版7-5)

横穴式石室の内部からは多くの遺物が出土している。中でも多いのが玄室出土の遺物で、特に攪乱層中からは多くの遺物が出土している。1号墳玄室内が大きな攪乱を受けていることは既に述べたが、調査当初、玄室内には多数の巨礫が投げ込まれていた(図7-4)。これは周辺の耕作の際、障害となったものをことごとく玄室内に投げ込んでいたためと考えられ、その為必ずしも1号墳に伴

うとはいえない遺物までもが、数多く集まるようになったようだ。玄室底面から近世土器類等も少なからず出土している。また近接する古墳出土遺物と接合する遺物もいくつか存在する。例えば、図27-14の遺物は3号墳出土の遺物（石室出土遺物。しかし主体部はほとんど全壊状態にある）と接合関係にある。玄室搅乱出土の遺物は広範な範囲で移動しているものがあって、その扱いは注意を要する。石室の出土遺物で、まず1号墳に伴うものとみなすことのできるものは、破壊を免れた玄室および前室床面の敷石上、又はその近くで検出した遺物に限られることをあらかじめ断っておきたい。

1号墳石室内の床面上で検出した遺物を図19に示した。残片が多く、旧状を確實に留めているものはごくわずかであるが、ある程度の副葬傾向をつかむことはできるだろう。

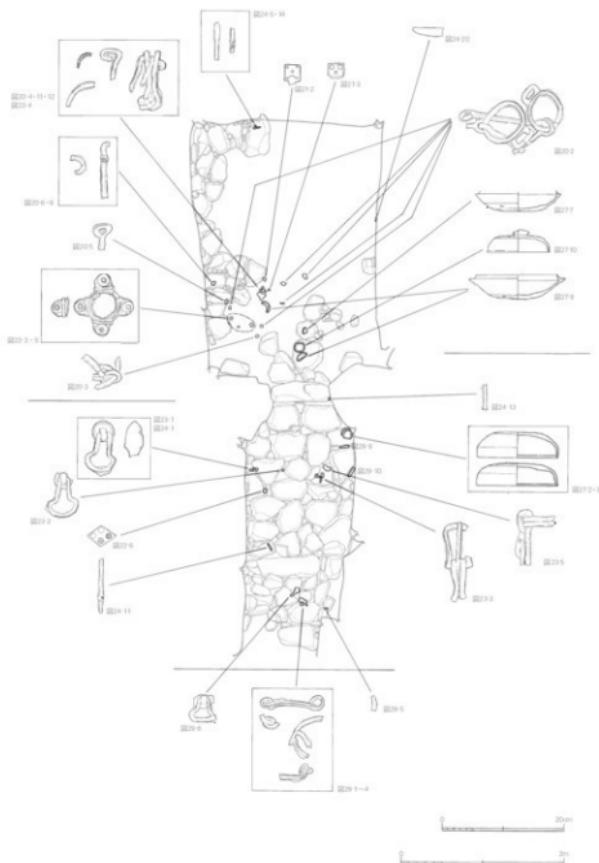


図19 石室内遺物出土状況 (1/8, 1/60)

### 玄・前室出土の遺物（図20～27、図版8）

#### ①馬具（図20～22）

轡（図20） 1はf字形鏡板片である。半ばが残るのみで、縁金を失う。鉄地金銅板張によるもので、鉢穴はX線分析及び肉眼観察によってある程度明らかになったもののみを図示している。2・3は素環鏡板付轡である。2はほぼ全形を窺うことができるもので、梢円形の素環部に板状の立間が付く。図19下には復元図を示す。3は引手や轡の環状部と鏡板素環部分の一部が残るのみである。4・5は引手の環状部で、形態が類似しており、本来一つの轡に伴うものであった可能性が高い。6は引手で、先端を曲げ棒状部分に巻き付けることによって、環状部を形成する。7・8は轡の棒状部分、9～12は環状部分の破片である。11は素環鏡板の一部であろうか。

杏葉等（図21） 1は三葉文楕円形杏葉の一部である。鉄地金銅板張によるもので、三葉文部分には密に鋲を施す。2・3は杏葉の吊下金具であろう。いずれも鉄地金銅板張製で、2は吊下部分、3は下半を失う。2では5箇所の鉢穴を確認でき全3でも同様の配置を探るのだろう。1～3はセットの馬装であった可能性が高い。

雲珠・辻金具・飾金具（図22） 1・2は雲珠である。1は脚部片。鉄地金銅板張によるもので、方形の脚を持つ。脚部の底は2箇所であろうか。2は鉢部分の一部で、鉄地のみが残る。3～5は辻金具である。3は全容の分かる個体であり、半円形の脚を4つ、等間隔に配置している。鉢部および各脚部上には、貝（イモガイ）製の装飾が埋め込まれていた痕跡が存在する。4・5は脚部片で、半円形を呈し、上部には貝製装飾を埋め込んでいたとみられる。3と同形品の一部であろう。6は飾金具である。鉄地金銅板張製で菱形を呈し、4箇所に鉢を打つ。縦3.4cm、横4.7cmを測る。

鞍（図23-1～2） 1・2とも鉗具に座金具、脚が付くものである。鉗具はT字形を呈し、刺金を持たない。脚の先端は欠落しているが、2は折り曲げられていた痕跡をみることができる。付着した木目の方向は脚金具と平行する。1・2とも形態が類似しており、本来は同一の鞍の付属品であろう。

鎧・鎧軸（図23） 1・2は鉗具と兵庫鎖の一部である。いずれの鉗具も輪金の中央がわずかに窪む形状のもので、刺金は棒状を呈している。3・4兵庫鎖に鎧吊金具がつくものである。鎧吊金具には吊り手部分と本体の一部が残るのみである。左右に一箇所ずつ鉢もしくは鉢穴が残る。7は鎧吊金具の一部である。鉢もしくは鉢穴が一箇所認められ、中にはその残欠が残る。断面は蒲鉾形を呈する。

#### ②武器（図23-1～19）

鉄鐵（1～18） 1～3は三角形鐵で、鐵身部のみが残る。4～18は長頭鐵で、4・5の鐵身は柳葉形を呈する。4～18は頭部または茎部の破片で、関部の残る大半の資料（4・6・10～14）は棘状關であるが、1点（15）のみ角關となる。

刀（19） 茎部片で、残長5.3cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmを測る。

#### ③農・工具（図23-20～25）

刀子（図23-20～22） 1は刀身部片、2・3は茎部片である。1は刃部幅1.3cmを測る。

その他（図23-23～25） 23は鉄斧である。袋部を有し、袋部と刃部との間にはわずかではあるが張り出しがある。全長8.9cm、刃部幅3.8cmを測る。24は鋤先である。刃部の残存幅は2.4cm。25は鋤であろうか。錆化が激しく、全形は不明である。

#### ④装身具（図24）

耳環（1～3） 1～3とも銅芯金箔張の耳環である。2・3はセットになるものであろう。1は外径180×195mm、内径110×125mm、開口部1.5mm、2は外径300×330mm、内径170×

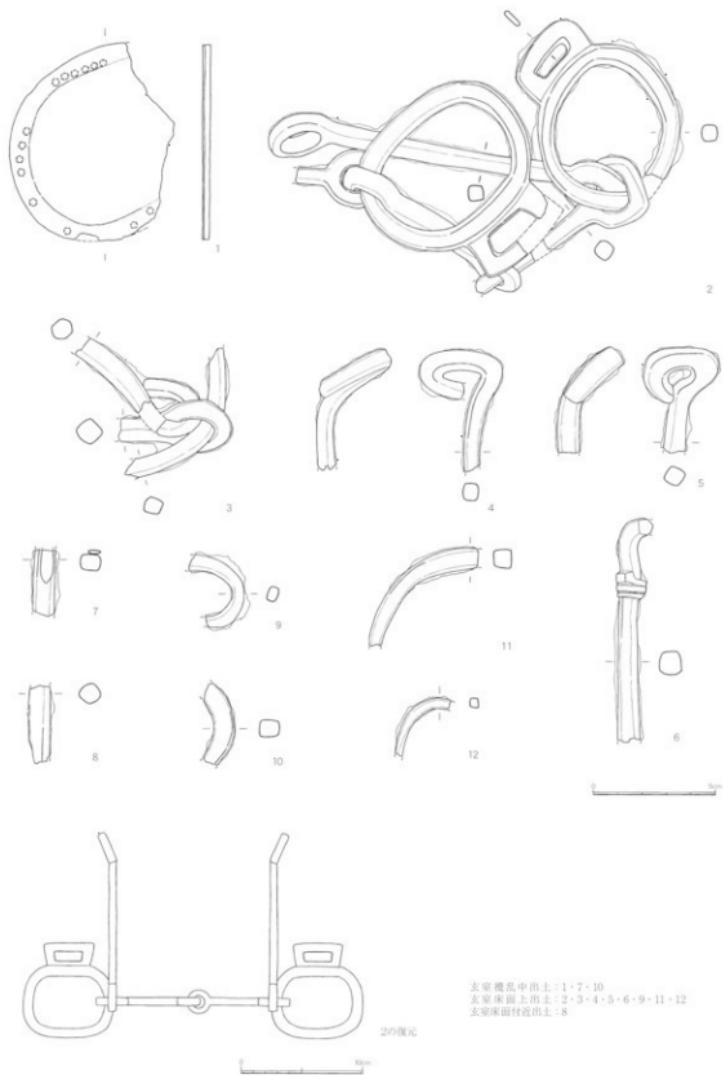


図20 玄・前室内出土遺物（1）馬具 1 (1/2, 1/4)

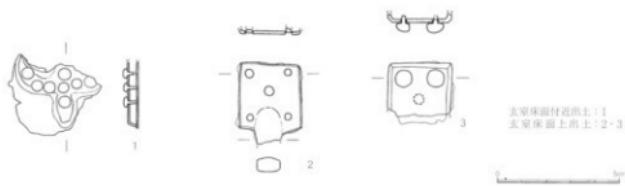


图21 玄・前室内出土遺物(2)馬具2(1/2)

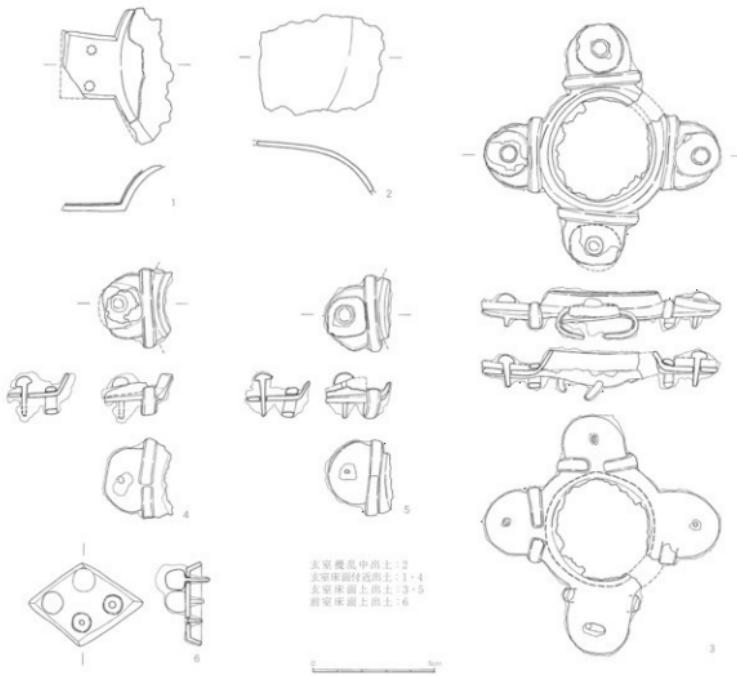


图22 玄・前室内出土遺物(3)馬具3(1/2)

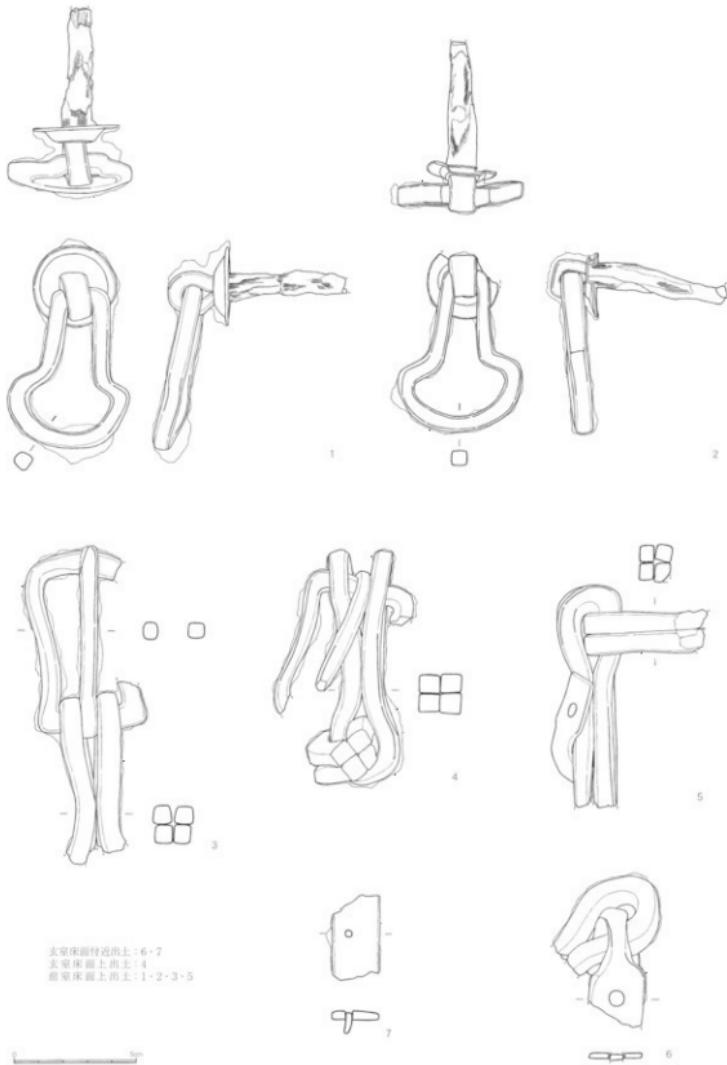


图 23 玄·前室内出土遗物 (4) 马具 4 (1/2)

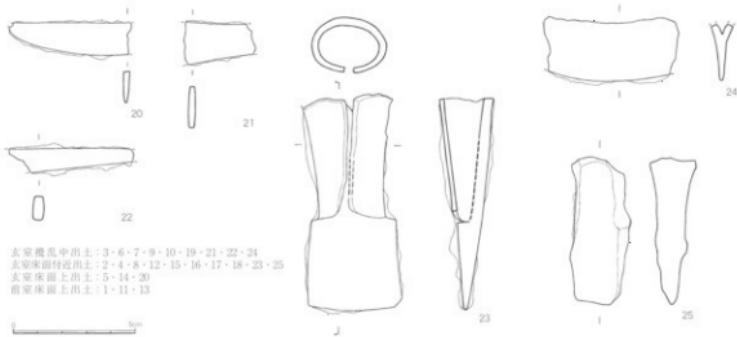
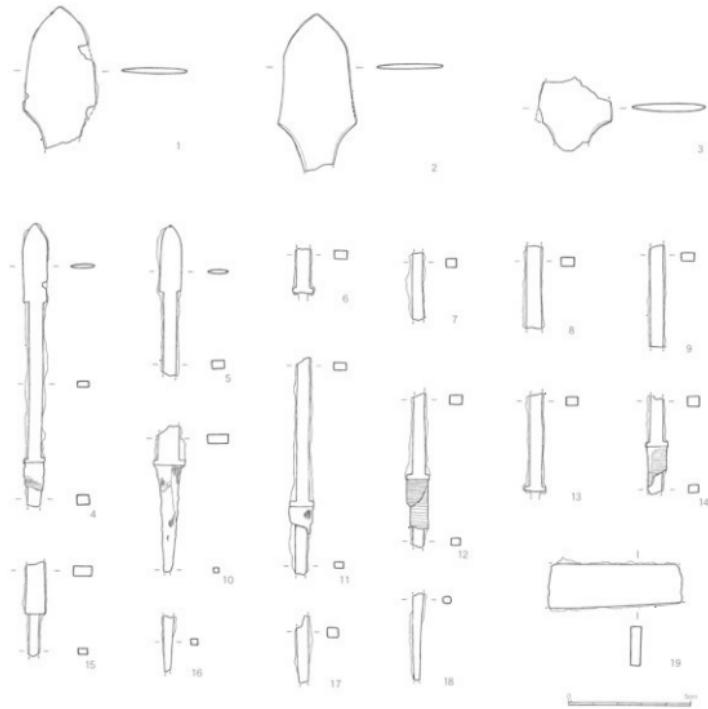


图 24 玄·前室内出土遗物 (5) 武器·工具 (1/2)

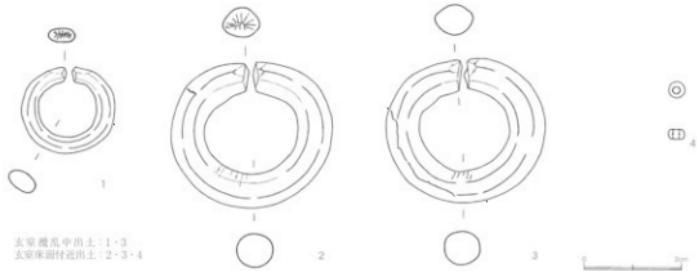


図25 玄・前室内出土遺物(6) 装身具(1/1)

190mm、開口部 1mm、3は外径 295 × 330mm、内径 160 × 185mm、開口部 1mm をそれぞれ測る。

小玉(4) 1点のみを検出している。ガラス製で濃紺色を呈する。直径 3.5mm、高さ 2mm。

⑤その他の鉄製品(図26)

釘(1・2) 1・2は、いずれも頭部をL字形に折り曲げたものである。1は残存長 9.4cm、断面 0.7 × 0.9cm を測る大形品である。玄室攪乱中より出土したもので、古墳に伴うものであるかは不明。2は長さ 5.6cm、断面 0.5cm を測る。一部に木質が残るが、木目はよく分からない。

不明鉄製品(3・4) いずれも薄い鉄板であり、わずかに曲面を描く。

⑥容器類

須恵器(図27・28)

蓋杯(図27-1～9) 1～5は杯蓋である。口縁部が段をなし、天井部と体部との境目に弱い沈線を巡らすもの(1)、口縁端部近くの内面に弱い沈線を巡らすもの(2・3)、口縁端部が弱い段をなすもの(4・5)がある。4・5は土師質。6～9は杯身。立ち上がりが比較的高く、杯部はふくらみを持ち、底部の回転ヘラケズりが1/2程度のもの(6～8)、立ち上がりがやや低く内傾し、体部は直線的で、底部の回転ヘラケズりが1/2弱のもの(9)がある。

壺類(図27-11～14・17) 11・12は長頸壺の口縁部である。12は外器面にカキメ調整を施す。13は壺の口頭部である。口縁部を肥厚させ、その中央に1条の沈線を施している。頭部中央には沈線を1条巡らし、その上方には波状文を2段にわたって描いている。14は台付壺等の脚部。方形の3方スカシを2段にわたって施し、スカシの間には2条、下方スカシ下には1条の沈線をそれ



図26 玄・前室内出土遺物(7) 釘など(1/2)

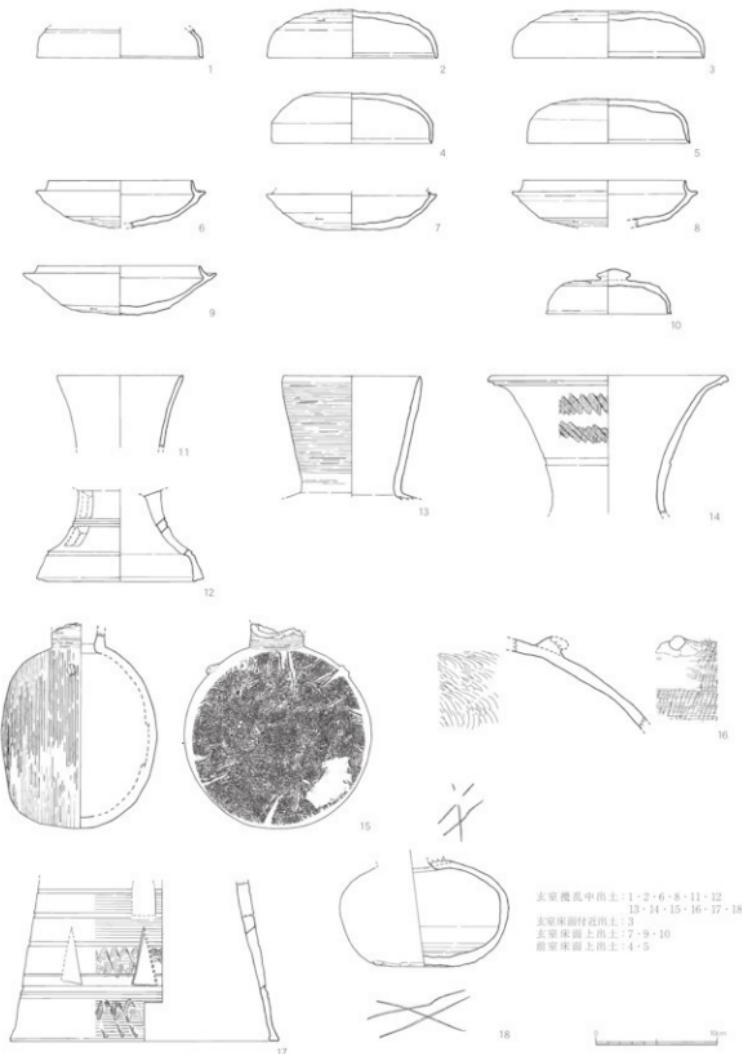


图27 玄·前室内出土遗物 (8) 土器 (1/4)

玄室地层中出土: 1·2·6·8·11·12  
去室床面附近出土: 3  
去室床面上出土: 4·5  
去室床面上出土: 13·14·15·16·37·38

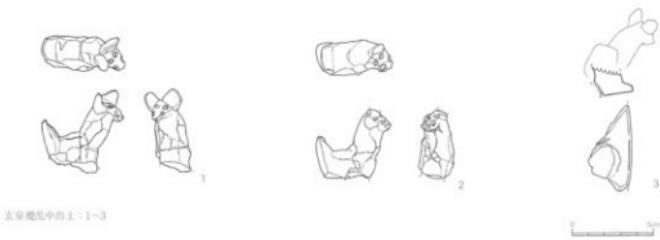


図28 玄・前室内出土遺物(9)小像(1/3)

それ又有する。10は台付長頸壺の蓋であろうか。天井部には宝珠形のつまみを付し、口縁端部は段をなす。17は台付壺、または器台の脚部であり、2段にわたってスカシを有する。その形状は1段目が三角形、2段目が長方形。外器面にはカキメ調整を施し、2段の波状文を1段目のスカシの位置まで施す。その後数条の沈線を描いている。

**瓶類**(図27-15・17) 15は提瓶である。口頭部を欠き、外器面にはカキメ調整を施す。18は平瓶である。底部には静止ヘラケズリを施す。尚、肩部と底部にはヘラ記号を有する。

**甕**(図27-16) 16は甕肩部片であるが、外面には把手を有している。外器面には平行タタキのちカキメ調整、内器面には円弧タタキをそれぞれ施している。

**小像**(図28) 尚、玄室攪乱中からは裝飾付須恵器の小像が2点、出土している(1・2)。1・2とも同様の意匠によってつくられており、欠落部分の少ない1をみれば、太い首と大きな耳を有し、顔には目などを表現したのであろう4点の刺突が認められた。顔の先端には窪みがあり、「口」の表現も認められる。尾部には板状の突起があるが、これはただの「尾」ではなく、「鞍」を意識したものではないだろうか。そうであれば、これら小像は「馬」を意図してつくられたものであるといえる。

また、小像を付したと考えられる須恵器の小片も見つかっている(3)。焼けひずみがひどく正確な部位は不明であるが、上面には波状文を描いている。取付部の形状をみれば、小像は小片外縁に斜行するような形で取り付けられていたことが分かる(3上図参照)。

#### 前室(仕切石～羨門部)出土の遺物(図29)

ここでは第2仕切石と羨門部との間の床面敷石上で出土した遺物について、述べることにする。

##### ①馬具(1～6)

**鞍**(1～5) 1は素環鏡板、2～5は引手・銜等の破片であろう。

**鞍**(6) 鉸具に座金具、脚が付くものである。鉸具はT字形を呈し、刺金を持たない。脚の先端は下方に折り曲げられている。付着した木目の方向は脚金具と平行する。

##### ②武器(7・8)

**鉢鐵**(7・8) 7・8とも長頸鉢片である。7は棘状閻を有し、茎部には木質が残る。8は茎部片。

##### ③その他(9・10)

**砥石** 前室の床面には砥石2が敷石として再利用されていた(図19)。

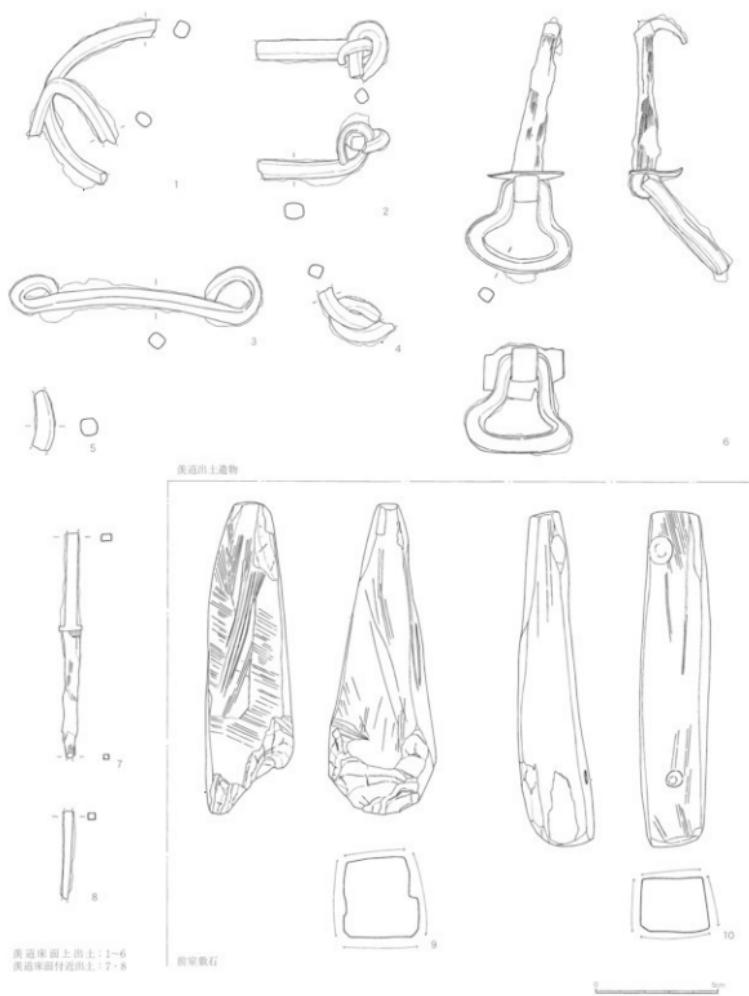


図29 前室（仕切石～羨門部）出土遺物など（1/2）

### 3. その他の時代の遺物

1は打製石斧である。1号墳東側の表土掘り下げ中に出土。2・3は石包丁である。いずれも残欠。2は幅5.0cmを測る。1は玄室内、3は周溝Ⅱ区より出土。4は砥石である。砂岩製で、上下を欠いている。周溝IV区より出土。5は板状鉄斧である。長さ12.4cm、刃部幅5.4cm、厚さ0.8cmを測る。周溝III区より出土。6は擂鉢、7は染付椀である。いずれも玄室中より出土。

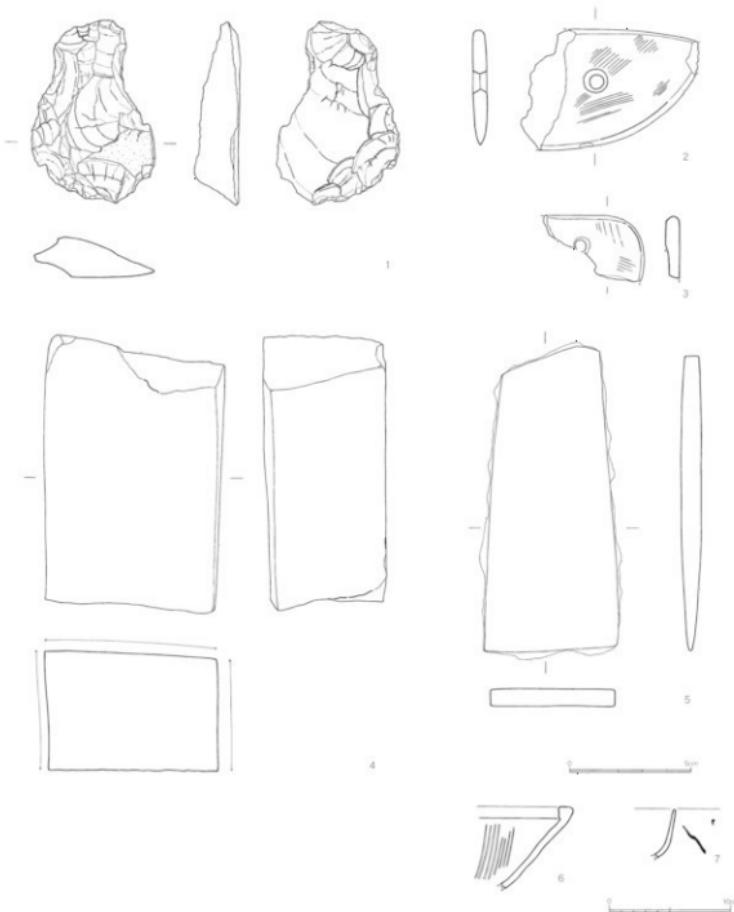


図30 その他の時代の遺物 (1/2、1/4)

### 第3章 まとめ

#### 1 出土遺物と時期

多くの破壊を受けていたにも関わらず、浦江1号墳からは以外に多くの出土遺物を見ることができた。特に馬具は、遺存状況は決してよいものではないが、まとまった資料を得ることができた。まず、轡をみれば、A：金銅製鏡板付轡と、B：素環鏡板付轡を有するものがある。Aは「字形鏡板片（図20-1）」のみが出土している。残欠であり詳細は不明だが、縁金の飾が密に施してあるところをみれば、「字形鏡板の中でも新しく位置づけることができるだろう。この鏡板とセットになる他の馬具は三葉文楕円形容杏葉（図21-1）が想定でき、杏葉の吊下金具（図21-2・3）や金銅製雲珠（図22-1）もその候補として考えることができるだろう。三葉文楕円形容杏葉はTK10（新）～TK43型式期に位置づけることができ、これは「字形鏡板の年代観と矛盾するものではない。

Bの素環鏡板付轡は玄室内および羨道部分から出土している。玄室出土では、轡部分がまとめて検出できた図20-2（轡1）の外、鏡板と引手・銜の結合部分の破片（轡2）（図20-3）が認められるため、少なくとも2組の轡が存在したのだろう。従って、羨道部分出土の1組の轡（轡3）も合わせて、計3組の素環鏡板付轡が副葬されたと考えることができる。出土位置から考えて、轡3は追葬の最終段階における副葬品である可能性が高く、3組の轡の内、最も後出するものだろう。1・2の先後関係は不明である。1の轡は立間の形状からTK209型式期に位置づけることができるだろう。この轡には、ほぼ同時期に位置づけることのできる貝製装飾付辻金具（図22-3～5）、金銅製の飾金具（図22-6）がセット関係にある可能性が高い。

次に土器、特に須恵器についてみていくことにする。須恵器は出土量が少なく、良好な状態で出土したものは少ない。出土須恵器の内、最も古式のものは石室内より出土した杯蓋（図27-1）で、TK10（古）型式期に位置づけることができる。ただ、文中にも述べたように玄室内出土の遺物は問題も多く、この資料は小片であることや、同時期の他の遺物が存在しないこと、周辺の古墳の大半がこの時期に当たることを考えれば、この資料は流れ込み等による混入品である可能性を考えることができる。石室の床面上より出土した資料をみれば、図27の内、蓋杯4・5・7がTK43型式期 TK209型式期にそれぞれ位置づけることができるだろう。周溝出土遺物をみても、これより古い資料は見出しえない。

このようにみれば、出土遺物は古い時期のものはTK10（新）～TK43型式期に相当することが分かる。金銅製の馬具が副葬されるこれが初葬の段階とみてよいだろう。そして、素環鏡板付轡が副葬され始めるのは追葬の段階であり、時期的にはTK209型式期以降であるといえる。閉塞中にTK217型式期の遺物が出土しており、この段階までの石室使用は想定しうるのではないだろうか。

#### 2. 浦江古墳群について

浦江古墳群は現在、A群とB群の2群よりなり、総数12基の古墳が存在していることは既に述べた。浦江1号墳はA群中の1基であり、本報告の表記に従えばA-1号墳となる。1において、遺物の時期はTK10（新）～TK43型式期に位置づけられることは述べた。ここではA群中における1号墳の位置づけについて考えることにしたい。

浦江古墳群A群における横穴式石室を整理すれば、次のようになる（図31）。

1類：単室無羨道横穴式石室。長方形プランで、「ハ」の字に開く前庭部を有するもの（10号墳：a類）や、入口部分の構造がはっきりしないもの（3（？）・4・5号墳：b類）、長方形プランで、右肩袖を呈するもの（7・9号墳：c類）がある。

2類：単室有羨道横穴式石室。羨道はごく短い。2・6・8号墳が相当する。

3類：複室構造横穴式石室。1号墳のみ。ただ、初葬時には単室構造であった可能性が高い。長い羨道部を有する。

型式的にみれば、1類→2類→3類という変遷過程が想定できるが、これを実際の遺物で検討することにしたい。1-a類の10号墳は周溝よりMT15型式期に相当する須恵器が出土している。また、b・c類双方とも出土須恵器はTK10型式期に相当するものであるが、b類で遺物の比較的残る4・5号墳をみれば、やや古式な蓋杯が残り、また、立ち上がりが高く全体が丸みを帯びてMT15型式期に近い形状の蓋杯も散見される。4・5号墳はc類の諸古墳に比べて若干先行するものといえるかもしれない。ただ3号墳はその出土遺物をみれば4・5号墳より後出するものといえ、このことからすれば、b類自体が時期的に限定されるものではない、ある程度時期幅のある石室構造なのかもしれない。2類の古墳から出土した須恵器もTK10型式期の範囲に収めることができるが、体部と天井部の境に沈線を巡らした個体ではなく、やはりb類（4・5号墳）により新しく位置づけることのできるものだろう。3類、つまり1号墳は先に検討したように、出土遺物は古いものでTK10（新）～TK43型式期に属する。

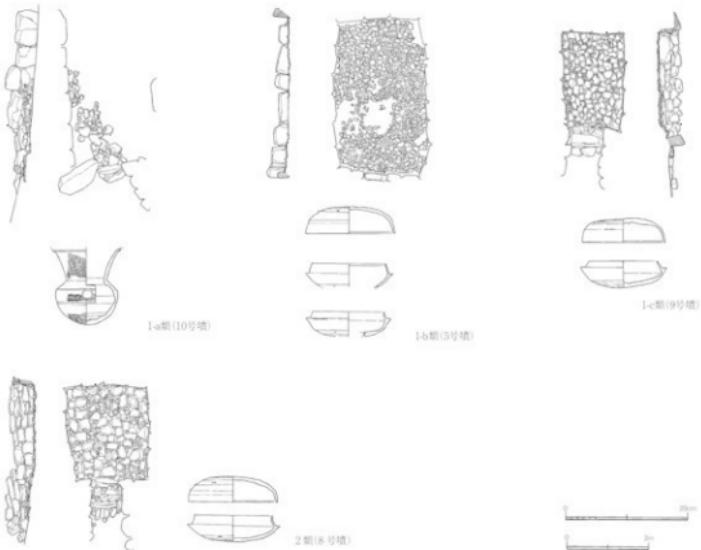


図31 溝江古墳群A群の諸石室（1/120、1/8）

このようにみてくると、浦江古墳群 A 群の変遷は、1-a 類（10 号墳）→ 1-b 類（4・5 号墳）→ 1-c 類・2 類→ 3 類のように整理することができるだろう。1 号墳は 2 類に該当する 2 号墳と周溝が切り合っており、1 号墳は 2 号墳に後出することが分かっている。したがってここでは 1 号墳の年代を出土遺物に表れた時期幅の内、やや新しく（TK43 型式期）おさえておくことにしたい。

ところで、浦江古墳群 A 群の変遷はそのまま、横穴式石室の有漢道化過程を示しているものといえ、1 類と 2 類の石室が一部共存することも 3 類へといたる過渡的状況とみることができる。3 類以降の石室は金武古墳群や羽根戸古墳群のように、むしろ丘陵側で主要な展開をみせる。このような占地の違いが何を示すのか、今後の検討課題としたい。

### 3. 彩色壁画について

浦江 1 号墳の玄室奥壁には彩色壁画が描かれている。彩色壁画すべての文様は明らかではなく、部分的に「渦巻状」の文様が認識できるのみである。近在する金武古墳群の一つ、吉武 K7 号墳にも彩色壁画が描かれており、福岡市内には以上 2 例の装飾古墳が知られるのみであるが、この吉武 K7 号墳の主要モチーフとしても、「渦巻状」文様は使用されている。尚、この文様については、吉武 K7 号墳調査報告書中で、柳沢一男氏は「渦文」と称しており、以下の本文においてもそれに従うことしたい。

渦巻き文はいくつか例が知られているが、藤手状を呈する浦江 1 号墳や吉武 K7 号墳例の「渦文」とは若干異なっており、これまでのところ、福岡市内の 2 例のみしかその存在は知られていない（図 32）。この「渦文」はこの地域独自の文様であるといえる。ではなぜ、このような独自性が発現するようになったのだろうか。

列島における彩色壁画の初現は熊本県菊池川流域における塚坊主古墳に求めることができる（TK47 型式期）。初期装飾（藏富士 1999）においても複数色による彩色は行われているが、これはあくまでも浮彫や線刻によって文様を表現しているのであり、色使いはあくまでも副次的なものに過ぎない。色の使い分けでのみ文様を表現するようになった段階こそが、彩色壁画の出現と捉えるべきである。この後、6 世紀中頃（TK10 型式期）には、この彩色壁画が九州各地に拡散し始める。TK10 型式期における彩色壁画を有する古墳は次の諸例となる（図 33）。

福岡県 ①宗像地域：桜京 2 号墳 ②遠賀川流域：王塚古墳 ③筑後川中流域：日岡古墳、富永古墳 ④矢部川流域：弘化谷古墳

熊本県 ⑤菊池川流域：白塚古墳、チバサン古墳、大坊古墳、横山古墳 ⑥白川下流域：釜尾古墳  
佐賀県 ⑦鳥栖地域：田代大田古墳

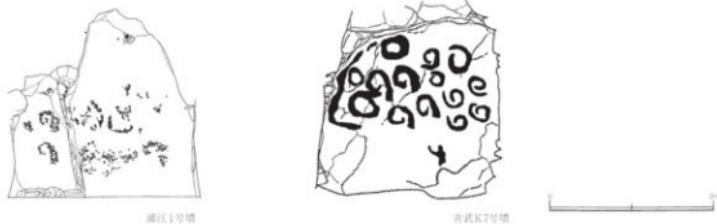


図 32 早良平野の彩色壁画（1/60）

以上挙げた古墳には次のような特徴がある。

特徴1 前方後円墳や大形の円墳である。

特徴2 共通モチーフ（連続三角文）がある。

特徴3 石屋形・石棚を有するものが多い。

特徴2・3は彩色壁画が熊本県域を起源とすることを示しているのだろうし、特徴1のように有力者層にのみ採用され、2・3のような特徴的な埋葬施設、装飾モチーフを共有することは、彩色壁画の広がりが単なる文化事象の伝播にとどまるものとして考えるのはなく、むしろ、祭祀のあり方を共通させるほどの強い諸首長間の結びつきをみるべきであろう。

この後、6世紀後半（TK43型式期）以降、彩色壁画が更なる広がりをみせ、数多くの彩色壁画が出現する。霧島沿岸（日明一本塚古墳）、田代・玖珠盆地（ガランドヤ古墳、穴觀音古墳など）、別府湾沿岸（鬼岩屋1・2号墳）、緑川中流域（今城大塚古墳など）といった広範な地域において彩色壁画が認められる。早良平野における彩色壁画の出現もこの段階に位置づけることができる。早良平野における2古墳における彩色壁画もそうであったように、この段階における彩色壁画の文様には個性的なものが多く、6世紀中頃に認められた共通性は認められない。このことは6世紀中頃に各地に出現した彩色壁画が2次的に拡散していったためと考えることができるだろう。この場合の広がりには先の画期的折に見せた強いつながりはみることはできない。

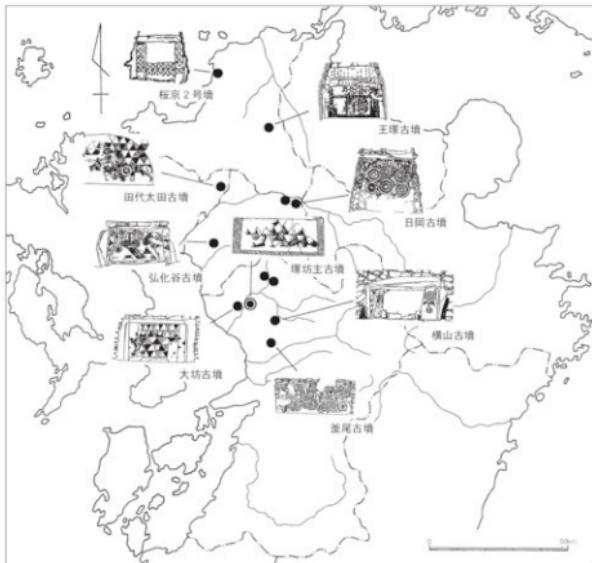


図33 彩色壁画の広がり

したがって、早良平野における彩色壁画の出現を考える際、殊更に熊本県域や福岡県南部域とのつながりや影響を過大に考える必要はないだろう。むしろ、遠賀川流域や宗像地域など、近隣地域の状況も加味する必要があるし、福岡平野における TK10 型式期における未発見の彩色壁画の存在も想定不可能なことではない。彩色壁画は水上を主とした交通の要衝に分布することが知られており、有明海から筑後川、そして遠賀川を結ぶ、人・モノの流れの中に、この早良平野が位置づけられていたことは注目すべきである。ただ、韓半島を見つめるのではなく、その脈絡の中で 1 号墳周溝出土の新羅土器も評価すべきことであるのだろう。

## おわりに

ここでは今回調査における成果を列挙し、まとめに代えることにしたい。

### 墳丘

径 23 ~ 25m を測る円墳であり、周溝北側から外へ向かって墓道が延びている。このことから周溝の一部は墓道として機能していたことが分かる。削平のため、墳丘盛土は残っていない。

### 主体部

複室構造を有する横穴式石室であり、南側へ向かって開口する。ただし、築造時には单室構造を採っていた可能性がある。天井部は失われており、石室自体の遺存状況は良いものではない。玄室床面は 2 面あり、漢道部分も大幅な改変が施されている。

### 出土遺物

周溝や石室内から、多くの遺物が出土しているが、攪乱も激しく、遺物自体の遺存状況は良いものではない。石室内からは馬具が比較的良好に検出されており、**「字形鏡板等の金銅製品の他、貝(イモガイ) 製装飾を付けた辻金具も出土している。**その他の遺物として、周溝内より出土した新羅土器、そして玄室攪乱中より出土した装飾付土器の小像などが、特筆すべき遺物として挙げができるだろう。

### 装飾

玄室奥壁には赤一色による彩色壁画を描いている。壁画の残りは悪く、わずかに渦巻き状の文様（渦文）が認識できるのみである。福岡市内では他に吉武 K7 号墳石室において、彩色壁画が描かれており、浦江 1 号墳が 2 例目の発見となる。吉武 K7 号墳は近隣に存在する古墳であり、その装飾文様にも共通性が認められる。

### 時期

出土遺物や石室構造より、浦江 1 号墳は TK43 型式期に位置づけることができるだろう。実年代としては、6 世紀後半を考えておくことにしたい。その後、TK217 型式期までは追葬等が行われたようだ。

## 文献

藏富士寛 1999 「装飾古墳考」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古会

柳沢一男編 1981 「重要遺跡確認調査報告書 I 装飾古墳・吉武 K7 号墳一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 68 集  
吉留秀敏編 2004 「金武 1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 792 集

図 版





浦江古墳群全景（東から）



浦江1号墳遠景（北西から）



浦江1号墳全景（南西から）



調査前現況（北東から）



横穴式石室全景1（南から）



横穴式石室全景2（南から）



左側壁側トレンチ（北西から）



右側壁側トレンチ（北東から）



奥壁側トレンチ（北西から）



トレンチ2土層（北西から）



墓道土層 1（南西から）



墓道土層 2（南から）



閉塞検出状況1（南から）



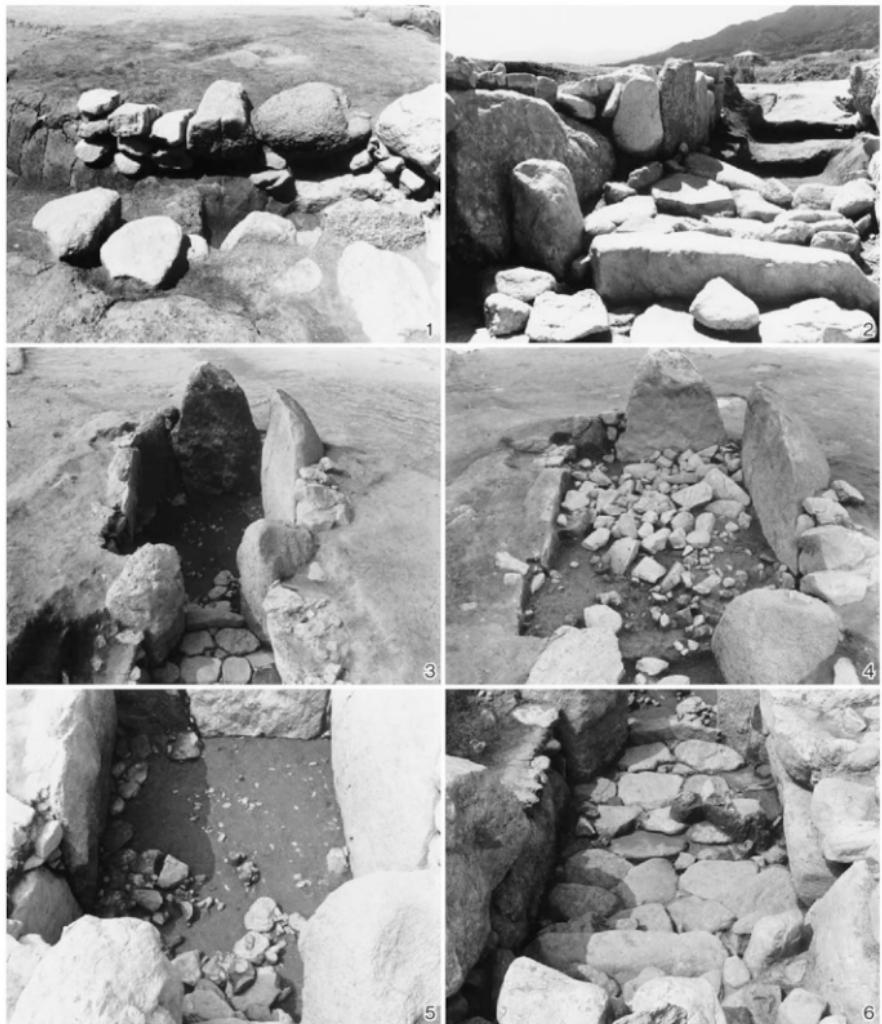
閉塞検出状況2（北から）



閉塞石（南から）



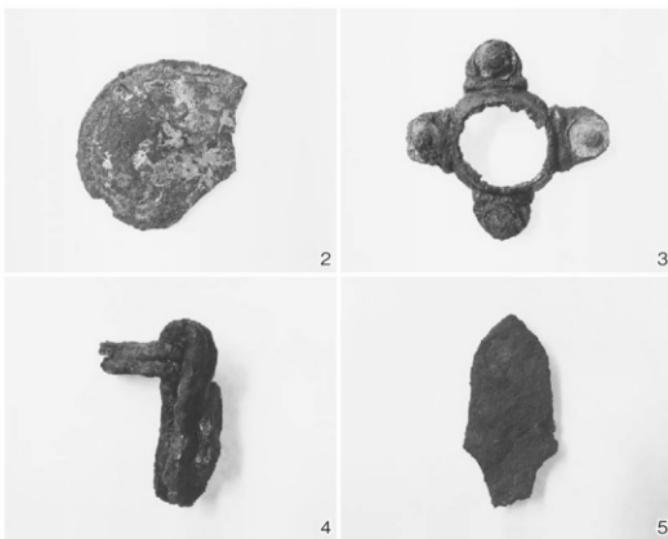
1 玄室奥壁（南から）  
2 玄門部（北から）  
3 玄室左側壁（東から）  
4 玄室右側壁（西から）  
5 前室・浜道右側壁（西北から）  
6 前室・浜道左側壁（北東から）



1 漢道左側壁（東から） 2 漢道右側壁（北から）  
3 玄室全景（南から） 4 玄室攪乱状況（南から）  
5 玄室内遺物出土状況（南から） 6 前室内遺物出土状況（南から）



1 1号墳周辺の諸古墳



2 図 20-1 3 図 22-3  
4 図 23-5 5 図 24-2

## 報告書抄録

ふりがな	うらえこふんぐん							
書名	浦江古墳群1号墳							
副書名	彩色壁画を有する古墳の調査－浦江遺跡第5次調査3－							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第862集							
編著者名	蔵富士 寛							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
浦江1号墳	福岡県福岡市 西区大学金武 字塚原	市町村 40135	遺跡番号	° ° ° 33° 31' 13"	° ° ° 130° 19' 19"	2002.11.1 ～ 2003.1.31	1,850m <sup>2</sup>	重要遺跡 確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
浦江1号墳	墳墓	古墳時代	古墳	須恵器・土師器 馬具・武具 装身具		彩色壁画		

# 浦江古墳群 1号墳

— 彩色壁画を有する古墳の調査 —

— 浦江遺跡第5次調査3—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第862集

2005（平成17）年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 田中印刷  
福岡市西区大字飯氏947-2

